Ⅱ　幼児期から育む柔軟な心

１　はじめに―今、幼児教育界に求められていること

幼稚園は、平成30年４月より新幼稚園教育要領が全面実施となった。幼児教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであるという基本理念は引き継がれたが、小学校との円滑な接続や３つの資質・能力の育成など今日的課題も含め、今まで以上に質の高い教育の実施が求められている。また、令和３年５月には、言葉の力、情報を活用する力、探究心といった生活・学習基盤をすべての５歳児に保障する「幼保小の架け橋プログラム」の開発・推進も打ち出された。新型コロナの収束の見通しがもてない中、幼児教育界もまた様々な工夫を凝らしながら教育の質の向上に取り組んでいかなければならない。

２　今、幼児教育界が抱えている課題

少子高齢化のあおりは今、公立幼稚園・こども園の園児数減少に表れている。年々園児数が減少し、閉園に追い込まれている園も少なくない。その一方で特別な支援を必要とする子供や外国籍の子供たちの増加が課題となっている。また、新型コロナの影響で子供たちの生活体験の不足が加速され、現場では、家庭や地域ではできない体験の充実や一人一人を大切に伸ばす工夫がますます求められている。子供たちの現状だけでなく、研修ができない、情報の共有が直接できない、人と関わる力が弱まっている等、教員の質の低下も懸念されている。コロナ禍での対策は各区、各園それぞれに違いが見られるため、いかに豊かな体験と安全を守り抜くかが大きな課題となっている。

３　柔軟な心を育む工夫～事例を通して考える

⑴　**柔軟な心とは**、言い変えればたくましく、しなやかな心であり、いろいろな状況に臨機応変に適応する力があることと言える。そのためにはまずは、自己が安定し、自己確立ができていること、その上で相手を思いやり、相手の立場に立ち、相手を尊重できる、人と関わる力が必要となる。

⑵　**幼児期に育てたい姿としては**、生活習慣・生活行動の自立、自分なりの考えをもつなどの自己の確立と、相手の存在を知る・気付く・受け入れる・認める、生かし合う、折り合いを付けるなどの人と関わる力。これらを発達に即した繰り返しの指導を通して「自分が好き、相手も好き」という思いや、人と関わる喜びを味わわせていきたいと考える。

⑶　**遊びや生活の中で見られる姿を通して柔軟な心を育むための援助の工夫を考える**

幼児は家庭という小さな集団から同世代の子供が集う大きな集団の中で様々な体験を通して学んでいく。柔軟な心も様々な出来事や人との関わりを通して育まれていく。以下、具体的な事例を通して援助のポイントを考えていく。

事例１　自分のことは自分でする経験を積み重ねる

○「先生、やっておいて」（３歳児５月）

Ａ児は一人っ子。家ではすべてお母さんが身の回りのことをしてくれていた。その生活から園生活では「自分のことは自分でしましょう」と教師から言われてもなかなか身に付かない。いつも「先生、やっておいて」といってタオルやコップを出さずに遊び出してしまう。そのたびに教師はＡ児に声を掛け、繰り返し援助を行っていた。

ある日、製作活動を始めようとしたらＡ児のハサミがないと言い、「先生が片しておいてくれなかったから」と怒り出した。一緒に探したが、なかなか見つからなかったため、その場は教師のハサミを貸し、製作を進めた。

幼児にとって初めての集団生活は不安でいっぱいなはず。まずは自分の居場所があるという**安心感**を与え、教師との**信頼関係**を築くことから始めなければならない。基本的生活習慣の確立には、幼児にとっても**必要感**があることが大事となる。タオルやコップを出す意味を繰り返し伝えることやできたときにほめることで身に付いていく。身支度だけでなく、片付けも大きな課題となる。自分のものは自分で片付けることが基本だが、そのことがなかなか身に付かない子供もいる。なくて**困ったという経験**も時には必要である。また、基本的生活習慣の確立には**家庭との連携**が欠かせない。園の方針を具体的に伝え、協力してもらうことで幼児の育ちが促されていく。

事例２　相手を知る、受け入れる経験を積み重ねる

○「Ｂちゃんがずるしてる」（４歳児11月）

Ｃ児は教師の話をよく聞き、指示通りに動いたり、周りの状況をみながら行動したりするしっかり者。一方で教師の指示に従わない子を許せないという姿があり、そのことでトラブルになることも多くなってきた。

ある日、みんなで鬼ごっこをする活動の中で教師が「鬼に捕まったらここで待っていてね」と言って待機する場所を指示し､鬼ごっこが始まった。Ｃ児はＢ児を捕まえたが、Ｂ児は捕まったことが悔しくて泣いてその場に座り込んでしまった。Ｃ児はすかさず教師の下へ行き「Ｂちゃんがずるしてる」と訴えに来た。

自分のことが自分でできるようになってくると、自分のようにできない子が気になるようになってくる。教師は、その子なりの段階があると判断し、対応していくことができるが、４歳児にはまだそこまでは無理である。この場合も正しいのはＢ児であるが、Ｃ児のまだまだ切り替えがうまくいかずに葛藤している気持ちも汲んであげてほしいと教師は願っている。Ｂ児には、Ｂ児の思いを受け止めながらも、Ｃ児の思いを代弁し、自分で動くまで待っていてあげようと相手の思いに気付くような橋渡しを丁寧に行っていくことが必要となる。**「相手にも思いがある」**ことを遊びや生活の中で**繰り返し伝えていく**ことで少しずつ相手を受け入れる柔軟性が育っていく。

事例３　支え合う経験を積み重ねる

○「私もそんなときあるよ」（５歳児１月）

Ｄ児は、自分の思い通りにいかないことがあると怒ったり、その場を離れたりしてなかなか切り替えが難しい面がある。今日もドッジボールで当てられ、悔しくて怒ってボールを違う方向に投げ、一緒に遊んでいた幼児たちに「やめて」と言われ、さらに怒りが高まっていた。教師が仲介に入ろうとしていたその時、Ｅ児がＤ児の近くに行き「私もそんなときあるよ。当てられると悔しいもんね」と言った。その言葉を聞いてＤ児は、気を取り直しボールを自分で取りに行き、「ごめんね。また入れて」と遊んでいる幼児たちに声を掛けた。

年長になると、様々な遊びや活動を通して友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。自分の気持ちをコントロールしたり、友達との関わりの中で折り合いを付けたりしながら成長していく。３学期頃には、友達の特徴や良さにも気付き、認めたり、生かし合ったりする姿も見られるようになってくる。この場面のＥ児も様々な葛藤を乗り越えてきたからこそ、Ｄ児に寄り添えたのではないかと思われる。Ｄ児もまたＥ児の言葉に自分を受け止めてくれる友達がいることに気付き、自ら切り替えることができたと思われる。

幼児期に様々な葛藤に出会い、それを乗り越える経験とそれを支えてくれる教師や仲間がいることを体験しておくことが柔軟な心を育むためには大事なことだと考える。そこには**一人一人をよく見て、受け止め、支える教師の役割と**、子供同士が**支え合い、高め合える学級経営**が必要である。

事例４　様々な人と関わる体験を積み重ねる

Ｆ幼稚園では、様々な人と関わる経験を広げたいと考え、月に一回地域の方を招いて手話体験をしている。12月は、本当に耳が聞こえない方も一緒にお招きして、聞こえないと困ることがあることを知り、自分たちにもできることがあることを考える機会となった。

Ｇ幼稚園では、隣接している特別老人ホームに月に一回出向き、交流を続けている。コロナ禍で今までのような交流はできなくなっている中で、手紙を書く、ビデオにして見てもらうなどの工夫をしながら地域との交流を進めている。

幼児期にいろいろな人と出会うことはとても意味がある。出会いの中での心の動きがその後の人生に大きな影響を及ぼすと思われる。コロナ禍で十分な交流ができなくなっているからこそ、工夫をしてつながっていく、**豊かな体験を積み重ねていく**ことが重要である。

事例５　保護者を支える

Ｈ児とＩ児は共に母子家庭。そのことで保護者同士が知り合いとなり、交流を始めた。しかし、どうも考え方が違うということが分かり、お互いを非難するようになってしまった。そのことを園への苦情としてＨ児の母が頻繁に電話を掛けてくるようになった。

コロナ禍で人との交流が疎遠になったのは子供だけではない。子供が幼稚園に入園することで保護者もまた久しぶりの集団生活の中で自分と向き合う体験をする。子育てに自信をもっている人はいない。少しでも話ができる相手を求めている。コロナ禍で園での参観も少なくなり、我が子の様子も直接見ることができない日々が続いている。そのことがますます不安感をあおり、不安を払拭したいがために様々な行動に出てしまうことがある。

園では、まずは不安な気持ちを十分に受け止める時間と場を設けることが必要となる。その役割は、担任ではなく管理職が担う。保護者同士に任せるのではなく、組織で対応する。また、解決を急がない。相手にも思いがある、考えがある、生活が違うことに気付いてもらえるようにじっくり伝えることができるのは園しかできない。**じっくり、ゆっくり、丁寧に向き合う**園の姿勢が鍵となる。

４　管理職の役割―５つの提言―

子供たちの育ちは、園を経営する園長やそれを支える副園長の考えが直接影響を及ぼすと考える。そのため管理職はその自覚と覚悟をもって園経営を進めていってほしいと願っている。ここでは管理職に望むことを５つの提言としてまとめ、発信していく。

⑴　管理職のリーダーシップの発揮を！

コロナ禍がそうであったようにこれからの時代はますます予測困難な時代となっていく。しかし、人格形成の基礎を培う幼児期の教育のあるべき姿は変わってはいけない。だからこそ、その時代の変化を捉えながらも、「子供にとって何が大事か」を基本に不易を守ることを第一に経営を進めてほしい。その上で時代の変化に対応し、乗り切る気概と専門家としての意識、意欲を高めていってほしい。これからの時代は、管理職にこそ「不易と流行のバランスを取る」柔軟性が必要となる。

⑵　自分を磨く努力を！

管理職には、専門性の発揮と情報収集、発信を率先して行う行動力をもってほしいと考える。これからの時代、今何が求められているのかを捉えられる情報収集能力は欠かせない。そのためには積極的に最新情報を集めるその努力が必要となる。その上で、何が大事で何を経営の柱にするのか、確固たる信念をもち、ぶれない教育方針をたて、教員に、保護者に地域に発信していってほしい。その行動力こそが教員を育て、子供を育てる大事な源となるのである。

⑶　教員を育てる努力を！

コロナ禍で不安になっているのは子供や保護者だけでない。教員自身も同じである。研修会のオンライン化は進んできたものの、生の意見や不安を口にする機会はいまだもてずにいるのではないかと懸念している。だからこそ、管理職が中心となり、保育の話や子供の話をする時間や場、雰囲気を作っていく必要がある。担任は誰しも自分の保育に自信がもてずに悩みを抱えている。反省評価はするものの自分一人では不安は払しょくできない。誰かと話すことで安心したり、次への意欲に繋がったりする。その機会がコロナ禍で失われている現状をぜひ管理職が打破し、実践を見て、適切なアドバイスをして、教員のやる気を高めていってほしいと願う。経営方針の浸透はもちろんだが、それ以上に研修体制の確立、日々の指導の充実に努めてほしい。管理職は教員を育てるのが第一の仕事であることは忘れてはいけない。その姿勢が教員の質の向上につながるのである。

⑷　小学校との連携・接続の推進を！

幼小の接続をさらに進めていくために設けられた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」。その文言は小学校の指導書にも、その姿を踏まえた指導の工夫を行ってほしいと明記されている。しかし、コロナ禍で人流は避けられ、交流活動や話し合いの機会さえ減少している現状がある。このままでは困るのは子供たちであり、教員たちである。幼児教育の現場では、子供の姿を通して10の姿を分かりやすく語り合い、自分たちで理解を深めた上で、小学校に積極的に発信をしていくことがいま求められている。その機会を作るのは他でもない管理職自身である。「10の姿の具現化、発信、接続」をキーワードに今一度積極的に取り組んでいってほしい。

⑸　保護者・地域との連携の強化を！

「コロナ禍だからこそ努力が必要」と現場は思っていることであろう。そして今までにはない様々な工夫や発信を試みていることであろう。昨年度は教育現場そのものが動けない状態となり、社会全体が混とんとした。その後オンライン化が進み、各幼児教育現場でも様々な工夫をして保護者や地域に発信をしてきた。ただ、現場に出向いて子供たちの生の姿を見る機会はかなり減少していて、今までのような行事や会は行うことができず、必要最小限の体験に終わっているのが現状である。まだ先の見えない状況ではあるが、子供たちのために園が中心となって大人の役割の共有を再認識し、協力し合っていってほしい。今まで積み上げてきた「子育て・親育て」の復活、強化を望んでいる。

５　おわりに

幼児教育に携わる関係者には、幼児期からの教育の重要性をしっかりと自覚し、これからの社会に求められる資質・能力を育み、共生社会の実現に寄与できる人材の育成に尽力してほしい。そのためには、できないことを嘆くより、できることを前向きにチャレンジする、ポディティブな心と行動力が必要なのだと思われる。